

No. 188 号 (第 39 号)

2025 年 12 月 1 日発行

会報「技術士しづーか」

公益社団法人 日本技術士会 中部本部 静岡県支部

事務局連絡先 Phone : 080-9194-4715 E-mail : ipej-shizu@ipej-shizu.sakura.ne.jp

支部長：加藤信之 事務局長/広報委員長：松世麻理子 会計：小澤靖 広報委員：森一明、岡井政彦



撮影：松世麻理子

2025 年 10 月 17 日 静岡市清水港

目 次

◆ 2025 年度第 2 回 CPD 講演会報告	P. 2
◆ 2025 年度第 3 回 CPD 講演会報告	P. 5
◆ テクノロジーカフェ	P. 6
◆ 静岡県青年友好代表団での中国訪問	P. 7
CPD 例会とテクノロジーカフェの予定	P. 9

表紙の写真説明

撮影場所：静岡市清水港

撮影者：松世麻理子（2025 年 10 月 17 日）

清水港にダイヤモンド・プリンセスがやってきました。今年は 80 隻以上のクルーズ船が清水港に入港予定です。

2025年度第2回CPD講演会報告

1. 概要

- ・日時：2025年8月16日（土）13:10～16:30
- ・会場：静岡県・男女共同参画センター「あざれあ」
501会議室及びWEB配信ハイブリッド方式
- ・参加者：会場21名 遠隔 Web26名
- ・テーマ：「持続可能な静岡の「農業」と「食」の最新動向」
- ・講演1：「静岡の「農業」と「食」の最新動向」
講師：関東農政局静岡県拠点
地方参事官 河合 亮子氏
副地方参事官 間山 誠治氏
- ・講演2：「風味のデジタル解析技術」
講師：静岡県立大学 准教授 伊藤 圭祐氏

2. 講演内容

- ・講演1・第一部 間山 誠二氏

「日本の農業を取り巻く状況と統計結果から見た静岡の農業の課題等」

(地球温暖化や少子・高齢化、いろいろ言われているけど、日本の農業、静岡の農業はどうなってるの)

日本の農業、特に静岡県の農業は、気候変動や人口減少といった多くの課題に直面している。しかし、統計データを分析することで、その現状と今後の課題、対策が見えてくる。

(1) 日本の農業を取り巻く状況

日本の農業は、地球規模の気候変動から大きな影響を受けている。2024年の世界の平均気温は過去最高を記録しており、高温による農産物の品質低下や、干ばつ・豪雨といった異常気象は、日本の農業にも深刻な被害をもたらしている。海外に目を向けると、世界的な人口増加や紛争による食料・資源争奪が激化しており、純輸入国である日本は食料自給率の低さからリスクに晒されている。

国内では、日本の人口減少が農業にとって大きな課題であり、国内市場の縮小に加え、農業者の急速な減少と高齢化は、農業を維持していく上で喫緊の問題である。その結果、農地面積や総農家数も減少の一途をたどっている。また、地域によっては、買い物困難者の増加や経済的な理由から食料が買えない人々が増えるなど、食料へのアクセスに関する問題も顕在化している。

(2) 統計から見た静岡の農業の現状と課題

静岡県もこうした全国的な傾向から逃れることはできない。統計データを見ると、農業者の減少と高

齢化は顕著であり、農業の担い手不足は深刻な問題である。また、静岡県の農業において特に影響を受けているのが茶である。茶の栽培面積と荒茶の生産量は縮小傾向にあり、「静岡茶」ブランドの地位を維持していくために対策が求められている。

こうした現状を踏まえると、静岡の農業の課題は以下の3点に集約される

- ・農地の維持と担い手の確保：農業を続けていくための基盤である農地を維持し、新規就農者や異業種からの参入を促すことが不可欠である。
- ・生産性の向上：労働生産性や土地生産性を高め、限られた資源でより多くの生産量を確保する必要がある。
- ・ブランド力強化と多様化：茶をはじめとする特産品のブランド力を高めるとともに、時代のニーズに合わせた新たな農産物の開発や付加価値を高める取り組みが重要である。

(3) 静岡と米について

興味深いことに、厳しい現状の中でも、静岡県は米に関する強みを持っており、総務省の家計調査によると、静岡市は米の購入金額が全国1位、浜松市も3位と、静岡県民は米を多く消費している。

これは温暖な気候と豊富な食材、そして古くからの米食文化が根付いていることが理由と考えられる。最近では、精米歩留まりの悪化やインバウンド需要の増加、消費者心理による買いだめなど、様々な要因で米の小売価格が上昇している。

(4)まとめ

静岡の農業は多くの課題を抱えているが、米の消費量に示されるような「食」への関心の高さや、豊かな自然環境という強みも持ち合わせている。

これらの強みを活かし、多様な働き方や技術を取り入れることで、持続可能な農業へと転換していくことが期待される。



写真1：間山氏の講演状況

・講演1・第二部 河合 亮子氏

「静岡県農業の課題解決に向けて」

～みどりの食料システム戦略・非農家の関与・スマート農業～

美しい静岡の農業を持続可能にするためには、地球温暖化対策、担い手の確保、そしてスマート農業の導入が不可欠である。これらの課題解決に向けた具体的な取り組みを紹介する。

(1) 地球温暖化対策

温暖化は、高温による農産物の品質低下や異常気象など、農業に直接的な被害をもたらす。これに対処するためには、温暖化による影響への適応策と、温暖化自体を防ぐ緩和策の両方が必要である。

適応策としては、暑さに強い品種への転換や栽培技術の改良、病害虫対策、遮熱剤の塗布などが挙げられる。一方、温暖化を防ぐ緩和策として、農業分野での温室効果ガス排出量削減が重要である。このために打ち出されたのが「みどりの食料システム戦略」である。

この戦略は、2050年までに農林水産業のCO₂ゼロエミッション化、化学農薬の使用量を50%低減、化学肥料の使用量を30%低減、有機農業の面積を25%に拡大することを目指している。これを実現するためには、水田からのメタン排出削減技術（中干し期間の延長など）や、プラスチック被覆肥料の見直し、電動農機やバイオ燃料への転換など、多様なイノベーション（技術革新）が鍵となる。

(2) 誰が農業を守るのか

農業の担い手不足は、静岡の農業が直面する大きな課題である。この課題を解決するためには、既存の農業者だけでなく、様々な人々が農業に関わる必要がある。

まず、地域で将来の農業像を描く地域計画を策定し、担い手への農地集約を進めることが重要である。また、親元就農や独自就農に加え、農業法人への雇用就農も重要な選択肢となる。さらに、新たな事業創出や原材料調達、地域貢献などを目的に異業種からの農業参入も増えており、行政や農業団体が連携して支援していくことが求められる。

農業に直接従事しないまでも、都市住民が農作業を手伝ったり、農産物のPRに関わったりする「関係人口」の増加も、農業・農村を支える人材の裾野を広げる上で不可欠である。

(3) 少ない人數での農業

農業者の減少は、一人当たりの負担増につながる。これを解決するためには、効率化を図ることが重要

である。まず、農地の大区画化や水路の管路化など、農業の基盤整備を進めることで作業効率を向上させる。

そして、最も期待されているのが「スマート農業」の普及である。これは、「農業」に「先端技術」を組み合わせるもので、自動操舵システムやドローン、ロボットなどを活用して、作業時間の短縮や労働負担の軽減を目指す。ただし、スマート農業の導入には、高額なコストや、多様な栽培条件への対応、普及のための情報提供不足といった課題がある。

これらの課題を乗り越えるためには、スマート農業に適した生産方式への転換や、サービス事業体の育成、そして技術開発の加速が求められる。

(4)まとめ

静岡の美しい農業を守るために、技術革新を前提とした地球温暖化対策、農家・非農家問わず多様な人々が農業に関わる体制づくり、そしてスマート農業による効率化が鍵となる。



写真2:河合氏の講演状況

・講演2

「風味のデジタル解析技術」 伊藤 圭祐氏

味と香りで構成される「風味」は、これまで主観的なものとされてきたが、近年では分子レベルでのデジタル解析が可能となり、食品開発や品質管理に革新をもたらしている。この技術は「おいしさ」を客観的・定量的に扱うことを可能にし、未来の食料問題解決にも貢献が期待される。

(1) 風味のデジタル解析技術の概要

「おいしさ」の約75%が重視されるという調査結果が示すように、食品開発において風味の評価は不可欠である。おいしさは、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の五感で知覚される。特に味覚と嗅覚が重要であり、これらの感覚はそれぞれ異なる分子感知メカニズムを持っている。

(2)味の感知メカニズム

甘味、うま味、苦味、酸味、塩味の五基本味は、舌にある味覚受容体に特定の物質が結合することで生じる。しかし、実は味だけでなく香りが風味（フレーバー）全体を大きく左右する。

(3)匂いの感知メカニズム

匂いは、約 400 種類の嗅覚受容体が特定の匂い物質と結合することで感知される。私たちは、これらの受容体が作り出す多様な組み合わせパターンによって、10 万種類以上の匂いを識別している。

(4)受容体の応答評価による風味のデジタル解析

風味の客観的・定量的な評価法として、官能評価や機器分析に加え、受容体解析という新しい手法が注目されている。これは、化学感覚受容体の応答を分子レベルで直接評価する技術である。

この技術を用いて、特定の物質が味覚受容体に与える影響を解析できる。例えば、カルシウムイメージングという手法で緑茶成分の苦味を評価したり、苦味を打ち消す苦味マスキング剤を探索したりすることが可能である。さらに、発光を利用した応答評価システムにより、食品そのものの味を客観的に評価することもできる。

嗅覚においても、全ヒト嗅覚受容体の応答評価システムが開発されている。これは、気相応答評価システムを用いて、匂いをヒトの嗅ぎ方により近い条件でデジタル化するもので、バラの香りなど、曖昧な感覚として捉えられてきた様々な匂いを受容体応答パターンとしてデータ化できる。

このような食品情報の DX (デジタルトランスフォーメーション) は、おいしさの設計、品質管理、食品情報の転送、さらには食文化の保存まで、多岐にわたる応用可能性を秘めている。

(5)合同会社 DigSense の事業と応用例

2023 年に設立された大学発ベンチャー合同会社 DigSense は、「風味のデジタル解析技術」を基盤に事業を展開している。

世界的な人口増加に伴う食料需要の高まりから、代替肉の開発が喫緊の課題となっている。代替肉開発の鍵は「おいしさ」と「畜肉らしさ」である。具体的には大豆の不快臭が課題だった。

DigSense は、この不快臭を感じる嗅覚受容体を特定し、マスキング効果の高い成分を見出した。

さらに、牛肉の匂いを嗅覚受容体応答としてデジタル化し、その違いを解析することで、代替肉の「畜肉らしさ」を判別できる AI を開発した。

(5)まとめ

ヒト味覚・嗅覚受容体の応答評価技術を基盤として“おいしさの分子設計”が可能になりつつある。「風味のデジタル解析技術」により、風味を客観的に解析し、食品開発の新たな時代を切り開き、新しい食品開発を加速させることが期待される。



写真 3：伊藤氏の講演状況

・所感・謝辞

今回の講演「持続可能な静岡の「農業」と「食」の最新動向」は、参加者がとても関心が高く、会場及び WEB 参加者からの質問が多数ありました。

また講演後の懇親会で、美味しいクラフトビールを飲みながら講師及び参加者同士の交流を深めることができました。

講師の方々に紙面をお借りしころより謝意を申し上げます。



写真 4：懇親会状況

（記：石垣 治久）

2025年度第3回CPD講演会報告

1. 概要

日時：2025年10月18日（土）13:10～16:30

参加者：会場20名 遠隔（Web）28名

テーマ：これからのおエネルギー政策と再生可能エネルギーマイクログリッドの実際

講演1：

「世界のおエネルギー情勢と日本の産業と生活への影響」

講師：常葉大学 名誉教授 山本隆三氏

講演2：「再生可能エネルギーだけで構成されるマイクログリッドの構築と運用～PV・BESSの最適容量推定と発電機の制御～」

講師：静岡大学大学院 准教授 松尾廣伸氏

2. 講演内容

講演1：講演は多くのデータを見ながら、講師が解説する形で進んでいく。産業革命前から現在までのエネルギー生産・消費についてのデータを解説された。オイルショック以降、使用する一次エネルギーの分散化が図られ、天然ガスの利用が進んだ。その結果、ロシア産の天然ガス・石炭の世界シェアが高まった。近年はロシアのウクライナ侵攻をきっかけとして天然ガス・石炭の価格が急騰している。

話はCO2による地球温暖化の話題に移る。現在では世界の電気の約3分の1は中国で使用しておりエネルギー起源のCO2排出量も突出して多い。ただし累計CO2排出量においてはまだ米国、EUの方が多く、他国から中国を批判するのは難しい。日本においてはFIT政策により太陽光発電の導入が進んでいる。その結果、夏場は電力需給バランスの調整が難しくなり、冬場は需要と太陽光発電のカーブの差異により発電設備の利用率低下をもたらしている。戦後の経済成長期ではエネルギー多消費型産業である鉄鋼、化学などの業種が日本経済を支えていたが、それらの産業の地位低



講演1 山本講師

下により経済が低迷している。今後のエネルギー需要の見通しとしては、データセンターの需要が高まると考えられている。調査会社によって異なるが今後5年で数倍の電力需要となると見込まれている。

講演2：講演1では地球温暖化の対策としての再生可能エネルギー大量導入について批判的な論調であったが、講演2では再エネを中心とした社会がやってくるという前提で話を進めていく。化石燃料の使用を減らして再生可能エネルギーの使用を増やすためには蓄エネ、蓄電システムの導入が必要となる。そのため研究中の様々な蓄エネ・蓄電システムのご紹介があった。コンクリート電池、圧縮空気、超電導電力貯蔵など。近年は水素による蓄エネが話題にのぼることが多いが、電気との変換が2回以上必要なため効率が悪く、現時点では難しいという見解が示された。ただし継続的な研究開発は必要である。



講演2 松尾講師

続いてタンザニアで行われた、静岡大学と現地大学のマイクログリッド共同研究についてのご説明があった。停電が頻発している小さい村において作物残渣からのバイオマス発電を活用しマイクログリッドを構築するというものである。バイオディーゼルを用いた完全再生可能エネルギーによる安価で安定した電力供給が可能な地域完結型システムを想定し、他の再生可能エネルギーとの組合せによる最も低コストなアイランドマイクログリッド構築を検討した。1/48スケール実験を行い想定と実際との差異を検討した。

3. 所感

今回、エネルギーという色々な意見があるテーマにおいて、どのような切り口で語っていただくか検討し再エネの大量導入について肯定的・否定的な2名の講師を選定した。事後アンケートでも「多様性があってよい」というご意見もいただけ、エネルギー問題を考えるきっかけ作りが出来たのではないかと感じた。

（記：CPD委員 森田一徳）

テクノロジーカフェ

1. はじめに

テクノロジーカフェは、コロナ感染症の影響もあり、しばらくは中断していましたが、令和3年度から2か月に1回のペースでオンラインを主に活動してきました。主催者であるNPO法人静岡団塊創業塾（原田和正理事長）が運営するシニアライフ支援センター「くれば」の事務所で聴講できるハイブリッド方式も採用し現在に至ります。

当支部は、法人会員として静岡団塊創業塾に登録しています。カフェの予定は、「くれば」ホームページにも掲載されます。令和6年度からは講師が「くれば」に出向き対面式講演が復活しました。

当カフェの目的は、一般市民向に技術テーマをわかりやすく説明し参加の方々とざっくばらんに意見交換する機会を大切にすることです。

2. 経過状況（令和4.12～令和6.4）

日付	題目（全文省略）	講師	参加（一般）
4.12	SDGs！知っていますか。	鈴木宣二	12（7）
5.2	水道施設の運転管理	牧野好秀	10（5）
5.4	牧之原用水のお話	池谷忠文	13（6）
5.6	下水道のしくみと災害	山崎宣良	6（2）
5.8	再生可能エネルギー	石垣治久	16（7）
5.10	スーパーコンピュータ	富田因則	10（4）
5.12	安全とノンテクニカル	馬渕大幾	8（4）
6.2	プログラミング的思考	安田英人	14（9）
6.4	参加のまちづくり	深澤陽子	15（6）
		合計人数	104（50）

R5.8、テクノロジーカフェを通算で数えて70回目を迎えたのを記念して名入りのボールペンを作り、主催者であるNPO法人静岡団塊創業塾に30本を記念品として贈呈しました。

題目の傾向は、この数年顕著になっている地震、水害などに関連する話題が多くなります。防災とまちづくりさらにはインフラのメンテナンスに関する話題も一般の方にも受け入れやすい題目になります。実際に上水道の施設や牧之原用水そして下水道などの現状と今後のメンテナンスの課題さらには地震などの災害時の被害への対策についても私たちには身近な話題でした。これらについても、講演のあと、活発な意見交換が行われました。

一方で、環境政策に関連してSDGsの話題や地球温暖化現象の原因となる二酸化炭素の削減が

一番の話題となります。講演では再生可能エネルギーを必要とするが課題も多いという状況について話が出ました。脱炭素に関わる問題にはカーボンニュートラルに通じる思考もあり講演題目に今後も展開されると思われます。

講師の選任については社会貢献委員会のテクノロジーカフェ専門委員4人により専門員会議で行います。令和6年度からは、今まで通り選任された講師が専門分野から題目を選定する方法を主としていましたが、趣向を変え、県支部で行う社会貢献活動の一環である理科授業の題材を取り上げてシニア層にも受け入れやすいストーリーを創出する手法も取り入れました。プログラミング的思考や参加のまちづくりなどが対象となりました。まちづくりを取り上げる趣旨には、住民参加が基本であり根底に災害対策のための事前防災にも繋がります。



深澤陽子会員の講演場面

上記写真は、令和6年4月18日にシニアライフセンター「くれば」でテクノロジーカフェを行った映像です。オンラインでの参加者と現地参加のハイブリッドでした。講師が理科授業で実施した液状化実験を参加者が替わりながら実際に体験しました。講師または参加者同士が対面にて交流できる良さを体感したケースでした

3. さいごに

テクノロジーカフェの運営は傍目には順調に推移してきたように見えますが、試行錯誤の連続でもあります。明るい話題としては、主役となる講師役にもまだ隠れた人材がいると思われることです。主催者の意向に添えるテクノロジーカフェを引き続き継続し存続していくためにも会員の皆様方のご支援ご協力が必要です。今後ともよろしくお願いします。

（記：山之上誠）

■静岡県青年友好代表団での中国訪問

静岡県青年友好代表団での中国訪問

1. はじめに

私は今回、中国浙江省人民対外友好協会が主催する招待プロジェクト「静岡県青年友好代表団」に参加する機会を得ましたので、その内容と現地での体験について報告いたします。本プロジェクトは、静岡県と浙江省の友好提携 50 周年という節目を迎えるにあたり、両地域の若い世代が互いの社会や文化を直接体験し、理解を深めることを目的として企画されました。参加者は概ね 40 歳以下の 31 名で構成され、大学生が約 3 分の 1 を占め、その他は学校教職員、自治体職員、民間企業の若手社員などが参加していました。

2. 旅程

旅程は 9 月 10 日、富士山静岡空港への集合から始まりました。静岡県日中友好協会会长・西原茂樹氏を団長として、団員一同は上海へ向けて出発しました。以前は浙江省の省都・杭州と静岡を結ぶ直行便が運航されていましたが、コロナ禍の影響により現在は運休しており、今回は上海を経由して陸路で浙江省へ入る形となりました。上海浦東国際空港に到着後、バスで約 1 時間半かけて嘉興市にある宿泊先のホテルへ向かいました。途中、高速道路は渋滞もなく非常にスムーズで、人口が多いにも関わらず道路整備や交通管理が行き届いていることに感心しました。



嘉興南洋職業技術学院にて

2 日目は嘉興南洋職業技術学院を訪問しました。日中双方の学生は、互いの文化を紹介するパフォーマンスとして、ダンスや水墨画などを披露しました。ゲームを通じて交流を深める場面もあり、言語の壁を越えた心の通り合いを体感できました。特に印象的だったのは、同大学が中国の大手音声プラットフォーム「喜馬拉雅（ヒマラヤ）」と連携して e コマース教育を実施している点です。近年の中国では、大学受験競争が依然として熾烈ですが、実践的な教育プログラムが若

者の関心を集め、教育の多様化が進んでいることが強く伝わってきました。



魯迅故里にて

午後は紹興市へ移動し、中国近代文学の巨匠・魯迅の生家を訪問しました。保存されている建物や展示内容を通して、魯迅が生きた時代の社会背景や文化、また日本との関わりについて学びました。彼の作品に込められた思想や社会批評の背景を現地で直接感じることができました。



蘭亭にて

3 日目は書道の聖地・蘭亭を訪れました。蘭亭は、書聖・王羲之が名作「蘭亭序」を書き上げた地として知られており、歴史的・文化的価値の高い場所です。団員のうち書道経験者は、書のパフォーマンスを披露しました。その後、浙江省の省都・杭州市へ移動し、夜には浙江省人民対外友好協会主催の歓迎レセプションに参加しました。ここでは浙江工商大学の学生たちと食事を共にし、歌やダンスの発表を鑑賞するとともに、中国での学生生活や若者文化について、日本語で直接意見交換を行うことができました。日本語学科の学生であったため、勉強や生活の様子を詳しく聞くことができ、相互理解を一層深めることができました。

4 日目は世界遺産・西湖を訪問しました。西湖は杭州市中心部からほど近い場所に位置しますが、一歩足

■静岡県青年友好代表団での中国訪問

を踏み入れると静かで美しい景観が広がり、都市の喧騒はまったく感じられません。湖上の船から望む景色はまるで水墨画の世界のようで、歴史と自然が調和した空間の奥深さを実感しました。



西湖

その後、中国茶葉博物館を見学し、中国茶の歴史、産地、種類などについて詳しい説明を受けました。また、日中双方による茶のパフォーマンスも行われ、日本の抹茶や煎茶とは異なる中国茶の作法を体験することで、文化的理解をさらに深めることができました。

5日目は、日本の漫画やキャラクターグッズを中国に輸入・販売する「ファンファン漫画」を訪問しました。ここでは日本の主要出版社の作品を中国市場に供給するだけでなく、現地の漫画家育成にも力を入れており、日本文化の浸透の様子を直接確認することができました。3日目のレセプションで交流した学生も、日本の漫画やアニメに非常に詳しく、現地でのコンテンツ人気の高さを実感しました。

5日間の滞在を終え、翌朝に帰国しましたが、参加者同士は帰国後もLINEやSNSで連絡を取り合い、静岡県内の日中交流イベントや茶文化関連の催しで再会するなど、交流は現在も続いています。



ファンファン漫画にて

3. 技術士の視点で気づいたこと

特に印象に残ったのは、「電気自動車の普及」と「監視カメラの多さ」です。市中の乗用車のみならず路線バスも電動化されており、体感的には走行車両の半数以上がEVでした。(EVはナンバープレートが緑のため一目瞭然でわかる。) ガイドによると、①新車価格がガソリン車の半額から3分の2程度であること、②ガソリン車には週1回のラッシュ時通行規制があるがEVは対象外、③休日の観光地周辺ではガソリン車の進入が禁止されるがEVは許可される、という事情が背景にあり、多くの市民がEVを選択しているとのことです。JETROの資料でも2024年の新車販売の45%がEVであると報告されており、現地での光景と統計が一致していました。浙江省を含む中国南部は気温が比較的高く、寒冷地で起こるバッテリー性能低下の問題が少ないため、EV普及に適している地域特性も影響しています。



杭州市内の様子(写っている全てがEV)

監視カメラの設置数にも驚かされました。交差点には複数台が設置され、市民の動きが逐一記録されているように見えました。EVの走行データもメーカー側で管理され、自家用車を無許可で業務用に転用した場合、遠隔で車両がロックされることもあるとのことです。こうした高度な監視体制は、現代中国社会の特徴を象徴していると思いました。



交差点の監視カメラ

今回の訪問を通じ、急速に発展する中国社会を自らの目で確認し、多くの学びを得ることができました。今後の国際交流の重要性を改めて認識し、この貴重な経験を今後の活動に生かしていきたいと考えています。

(記：森田一徳)

CPD 例会、テクノロジーカフェ、理科支援の実績と予定

■CPD例会 実績と予定

名 称	日 程	内 容
支部年次大会 第1回記念講演	2025年5月31日(土)	記念講演 「静岡県における森林の現状と針広混交林への誘導による生態系サービスの向上」 静岡大学教育学部教授小南陽亮氏
第2回例会	2025年8月16日(土)	テーマ 「持続可能な静岡の「農業」と「食」の最新動向」 講演1 「静岡農業の課題と今後必要な取組」 関東農政局静岡県拠点 地方参事官 河合 亮子 氏 講演2 「風味のデジタル解析技術」 静岡県立大学 准教授 伊藤 圭祐 氏
第3回例会	2025年10月18日(土)	テーマ：これからのエネルギー政策と再生可能エネルギーマイクログリッドの実際 講演1：「世界のエネルギー情勢と日本の産業と生活への影響」 常葉大学 名誉教授 山本隆三氏 講演2：「再生可能エネルギーだけで構成されるマイクログリッドの構築と運用～PV・BESS の最適容量推定と発電機の制御～」 静岡大学大学院 准教授 松尾廣伸氏
第4回例会	2025年11月7日(金)	テーマ：「狩野川放水路完成60年、放水路の役割とその影響」 講演：「狩野川放水路がもたらす河川流域と沿岸域の生物に及ぼす影響」 静岡大学教授 塚越哲氏 見学会：狩野川放水路長岡トンネルおよび狩野川資料館
産学官セミナー	2025年12月13日(土) 予定	テーマ：「自然災害伝承碑から考える防災」 講演1：自然災害への取組みと災害伝承 静岡大学防災総合センター 客員教授 岩田孝仁 氏 講演2：「災害伝承」に関する研究・活動の紹介 東北大学災害科学国際研究所 准教授 佐藤 邦輔 氏 講演3：自然災害伝承碑を活用した災害伝承を学ぶイベント事例 一般社団法人災害伝承普及協会 代表理事：承山 理央 氏 理事：伝宝 照明 氏 講演4：自然災害伝承碑探訪の取組み 日本技術士会中国本部山口県支部 技術士（建設、総合技術監理部門） 内山省三 氏
第5回例会	2026年2月21日(土) 予定	「倫理」をテーマに内容検討中

■テクノロジーカフェ 実績と予定

日 程	内 容
2025年4月17日(木)	「電気自動車のギモン全てお答えします！」 森田一徳会員（電気電子部門）
2025年6月19日(木)	「地盤がもたらす災害事情 -地質屋が指摘する地盤のあれこれ-」 秋山尚之（建設、応用理学部門）
2025年8月7日(木)	「若者のモチベーションアップ」 鈴木宣二会員（経営工学部門）
2025年10月16日(木)	「再生可能エネルギーと風力発電」 服藤正明会員（機械、金属、経営工学、環境、総合技術監理部門）
2025年12月18日(木) 予定	「道路のことがわかるお話」 田中寛会員（建設、総合技術監理部門）
2026年2月19日(木) 予定	「電気を遠くへ送るには」 岡井政彦会員（電気電子部門）

■小学校等の理科特別授業 実績と予定

日 程	内 容
2025年9月	富士市富士川第1小学校、富士宮市上野小学校、沼津市沢田小学校
2025年11月	浜松市舞阪小学校、富士市富士川第1小学校、 テクノフェスタin浜松（静大工学部）理科実験教室
2025年12月予定	磐田市磐田西小学校

■編集後記

この9月に73歳の誕生日を迎えました。会社現役時代から退職後の現在まで、技術士稼業も35年経過しました。今も技術士という肩書だけで、企業の技術支援・顧問、静岡県の公的な業務依頼などの仕事を受けております。技術士資格は高齢になっても、社会で信頼される立派な資格だということが実感されます。（岡井）

例会の講演や県の浙江省訪問など盛りだくさんな内容でした。執筆者の皆様ありがとうございました。（森）

こここのところ12月13日に開催予定の産学官セミナーの準備に追われています。防災に关心のある方、歴史がお好きな方・・・etc. ご参加をお待ちしています。（松世）

数か月前の猛暑から一転ようやく寒くなつきましたがみなさん体調管理はいかがでしょうか。インフルエンザワクチン接種も終わり冬支度万全です。まもなくクリスマス、時間が経つのが早いですね。（加藤）

第45回地域産学官と技術士との合同セミナーIN SHIZUOKA 2025

自然災害伝承碑から考える防災

石に刻まれた文字が未来を救う！

日時・会場

2025年12月13日（土）

セミナー：13:00～17:20

会場：静岡県男女共同参画センター“あざれあ”（参加費：無料）

交流会：18:00～20:00

会場：レストランAoki（会場より徒歩5分）（参加費：6000円）

セミナー内容

自然災害伝承碑は過去の災害を未来に伝えるものですが、現実は忘れ去られている碑が多くあります。災害の記憶を未来に伝えることにより安全な社会を守るために、現状の問題を振り返り、未来につなげる方法について産・官・学の専門家が導き出します！

講師

静岡大学防災総合センター	客員教授 岩田 孝仁 氏
東北大学災害科学国際研究所	准教授 佐藤 翔輔 氏
一般社団法人災害伝承普及協会	代表理事 承山 理央 氏
	理事 伝宝 照明 氏

日本技術士会中国本部山口県支部
技術士（建設、総合技術監理部門）内山 省三 氏



公益社団法人 日本技術士会 中部本部 静岡県支部

事務局：〒424-0943 静岡県静岡市清水区港町1-5-6

TEL : 080-9194-4715 E-mail : ipej-shizu@ipej-shizu.sakura.ne.jp
<http://ipej-shizu.sakura.ne.jp/>